



特別展ギャラリートークの様子 平成29年(2017)12月3日撮影

龍子没後50年特別展を平成29年11月3日～12月3日に開催し、計4,423名の来館者でにぎわいました。最終日のギャラリートークには、100名をこえる参加者が集まりました。

大田区立龍子記念館版 記念館ノート

第2号

発行：2018年3月6日

編集：大田区立龍子記念館



東京藝術大学の最先端のデジタル技術と日本画の伝統的手法によって《桜芥子図襖》が複製されました。

《桜芥子図襖》は、龍子旧宅に取り付けられていました。龍子こだわりの建物の意匠や四季折々の草花に加え、画家の生活した息吹を感じられるこの空間も、龍子公園の新たな魅力となりました。

また、龍子記念館の指定管理者である公益財団法人大田区文化振興協会の創立三十周年を記念する事業として、龍子旧宅内にかつて飾られていた伝儀屋宗達の《桜芥子図襖》(一六二四～四三年頃、当館蔵)の高精度複製を、東京藝術大学 Arts & Science LAB. と株式会社オフィスエンス同協会の共同プロジェクトで行いました。東京藝術大学が開発した「クローン文化財」技術を駆使して見事に複製された

《龍子公園の新たな魅力》
龍子記念館の向かいには、龍子公園があり、川端龍子の旧宅とアトリエを保存しています。龍子公園は、記念館の開館日の10時、11時、14時から解説付きで見学することができます。昨年から取り組みとして、龍子公園の解説を職員だけではなく、大田区に住む事業協力員とともに実施しました。事業協力員は、記念館が作成したマニュアルをもとに講習を受けて「公園デビュー」をはたした実力派ぞろい、解説のポイントもそれぞれの個性が光ります。これからも地域との連携をより深めていくため、事業協力員の育成を行い、多彩な事業協力員の解説を龍子公園の魅力のひとつとなるようにしていきます。

館のトピックス

平成30年度 展示予定

○名作展「ベストセレクション 龍子記念館の逸品」

4月28日(土)～8月26日(日) (会期中、一部展示替え)
展示解説:5月6日(日)、5月27日(日)、6月24日(日)、7月29日(日)、8月26日(日)

○名作展「異国の風景 エキゾチズムへの熱狂(仮)」

9月8日(土)～12月9日(日)
展示解説:9月30日(日)、10月28日(日)、11月25日(日)

○名作展「古典と革新 いかにして龍子は乗り越えたのか(仮)」

12月22日(土)～平成31年4月14日(日)
展示解説:1月27日(日)、2月24日(日)、3月31日(日)
※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

館の基本情報

《所在地》

大田区立龍子記念館

〒143-0024 東京都大田区中央4-2-1

TEL 03-3772-0680

URL <http://www.ota-bunka.or.jp/ryushi>

《入館案内》

●開館時間 午前9時～午後4時30分まで
※入館は午後4時まで

●入館料 大人200円、小中学生100円
※65歳以上(要証明)、6歳未満は無料
※特別展の入館料は、企画内容によりその都度定める。

●休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日) 年末年始(12月29日～1月3日)、展示替えの臨時休館

新収蔵作品《阿吽》についての考察

大田区立龍子記念館担当学芸員 木村 拓也

■《阿吽》を制作した院展時代

平成二十九年年度、寄贈によって新しく収蔵された作品のひとつに川端龍子《阿吽(あうん)》がある(挿図1、註1)。この作品は、大正七年(一九一八)三月の第四回日本美術院試作展覧会に出品され、三十三歳の龍子の若さあふれる情熱が全面的に表わされた一作となっている。洋画から日本画へと転向してわずか一年余りで、龍子は、大正四年(一九一五)の再興第二回日本美術院展に初入選を果たした。それからほどなくして、大正六年(一九一七)には、速水御舟、小川芋銭、北野恒富とともに日本美術院(院展)同人に推挙された。本作は、同人推挙の翌年に発表された作品であり、院展内でその存在感を増していった龍子の勢いを見てとることが出来る。

この試作展は、大正四年(一九一五)から設けられたもので、院展の同人、院友、会員に限定された出品者が、「積極的未完成を試みていく展覧会」であった。当時の『読売新聞』の展覧会評において、「若い作家の意気込みが場内を壓して、其作品の上に、自由な試みによつてむしろ盲目的に荒れ狂つてゐる、そして之等の中から何者か生れ出なくてはならぬといふ勇ましい形勢」と、その特色が報じられている(註2)。



挿図1 新収蔵作品の川端龍子《阿吽》1918年

には、龍子は院友となった翌年の大正六年(一九一七)の第三回展から出品しており、その後制作された『白日夢』(大正八年(一九一九))、『土』(大正八年(一九一九))、『花と鉦屑』(大正九年(一九二〇))、いずれも当館蔵にも洋画的手法が意識的に取り入れられていった(註3)。

したがって、本作《阿吽》は、洋画から日本画へと転向した龍子が、院展で活躍の場を与えられ、洋画的傾向を強めていく過渡期に制作された一作として捉えることができる。そして、大正十(一九二一)年の再興第八回院展に出品した『火生』(当館蔵)にいたる制作の展開においても重要な位置づけとなる作品であると私は考える。というのも、院展時代、特に関東大震災以前の龍子作品は現存しているものが、非常に少ないためである。前述の当館所蔵の作品以外では、『靈泉由来』(大正五年(一九一六))、永青文庫蔵、『慈悲光礼讃(朝・夕)』(大正七年(一九一八))、東京国立近代美術館蔵、『安息』(大正八年(一九一九))、松岡美術館蔵、『草露行(自画像)』(大正九年(一九二〇))、横須賀美術館蔵、などに限られている。『火生』が、その色彩の激しさと大きさから「会場藝術」という批判を受け、龍子の画業において大きな分岐点となっていく過程に、この《阿吽》が加わることで、龍子の作品制作についての研究をより深めていけるだろう。

■龍子の描いた獅子をめぐって

勇猛な二頭の獅子が、金屏風に朱と群青の鮮やかな色彩で力強く描かれた《阿吽》に対して、当時は厳しい批評がなされた。『美術新報』においては、「構図の上からは兎に角纏て居り色彩悪からずと雖も氏が未だ裝飾的の味に拘ぜずして寫実の分子夥しきは甚だ遺憾」と述べられている(註4)。



挿図2 終戦の年に発表された六曲一双の《牡丹獅子》1945年

確かに、龍子の画業から切り離して、本作を画面上の表現手法だけで判断するならば、二頭の獅子の荒々しさは、龍子の若さそのものが表出しているのかも知れない。しかし、龍子は画業の要所において、印象的な獅子の図を描いている。その一環の中で本作を眺めていくならば、溢れんばかりの若さこそが本作の魅力といえることができるのではないだろうか。

龍子が要所において描いた獅子の図として筆頭に挙げられるのが院展を脱退する年に制作された『華曲』(昭和三年(一九二八))、山種美術館蔵)である。『華曲』は、院展脱退後すぐに開催された龍子新作展において発表された。画面内の洗練された筆致で表わされた獅子は、能楽「石橋」の一場面のように牡丹に戯れている。その軽やかな舞は、脱退によって院展内での不和から解放された龍子の心持ちを表現するかのようである。また、戦後には、昭和二十五年(一九五〇)の歌舞伎座再建に際して、龍子は『青獅子』を制作している。この獅子の図は、日本の戦後復興の象徴として描かれたものと捉えることができる。そして、終戦の年に描かれた《牡丹獅子》(挿図2)にも注目したい。この作品は、終戦わずか二ヶ月後に開催された第十七回青龍展で、『臥龍(当館蔵)』、『爆弾散華』(当館蔵)とともに発表された一作である。自宅が被災に遭ったにもかかわらず、展覧会の開催を中止しなかった龍子の決意は、六曲一双屏風の二頭の獅子に力強く表わされた。

このように獅子の図の展開を見ていくと、最初の獅子の図といえる《阿吽》にも一連の作品と同様の龍子の気迫を読みとることが出来る。さらに、この《阿吽》に込められた気迫が、後に龍子が標榜した「健剛の藝術」に昇華されていったと考えるならば、発表から百年を経て、『阿吽』は川端龍子の画業とともに再評価されていくことになるだろう。本作については、平成三十年度の展覧会で公開する予定である。

註

- (1) 『美術画報』(四十一編巻六、一九一八年四月六日)には、「獅子」という題名で図版掲載されているが、本作の箱書きにしたがって「阿吽」という題名で記載する。
- (2) 『美術院習作展覧会』、『読売新聞』一九一五年三月一七日
- (3) 川端龍子『吾が画生活』(大日本雄辯会講談社、一九五一年)には、『土』の制作以前の龍子は「画壇の一方には寫生主義が擡頭して(中略)、未だ日本画に就ての確固たる信念が出来てゐなかつた(一一一頁)」とある。
- (4) 『美術新報』二八三号、一九一八年四月

参考文献

日本美術院百年史編集室編『日本美術院百年史第四巻』日本美術院、一九九四年